

聴覚障害児の学習のつまずきに対する指導について (12)

—これまでの指導例から想定される認知の特性—

菊地和則

(仙台市立柊江小学校)

Key words: つまずき、情報処理、認知特性

1. 目的

聴覚障害児の学習のつまずきは、情報を処理するプログラムの問題であるという視点に立ち、前回の論文(菊地、2016)で情報処理プログラムの実態について仮説を示した。今回は、この仮説を基に、学習のつまずきの具体例としてこれまで報告してきたものを包括的に分析・整理しながら、聴覚障害児の認知の特性について述べたい。

2. 情報処理の実態についての仮説

(1) 実態把握において土台となること

前回報告(菊地 2016)で、ある語(A)を知っているかどうかを問われたものの答えられなかったケースについて、情報処理の状態を予想して図示した。このケースそのものの報告は当学会論文集(菊地、2011)を参照願いたい。

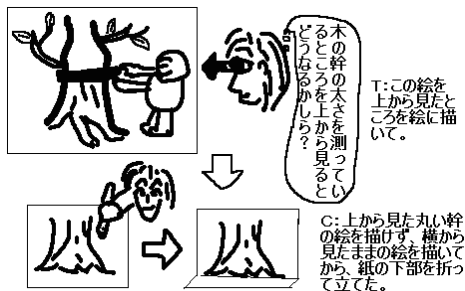
このケースと出会うまで、「知っているかどうかを答えられない」ケースはなかった。児童は日常の会話で不自由することはなく、このことに気付いたときは大変に衝撃を受けた。と同時に、筆者のこれまでの一連の報告において、当初から、聴覚障害児の情報処理では、すでに得ている情報がつながりにくいという大きな課題があると予想されていたことから、これは最も典型的なものであると考えた。すなわち、①会話で不自由のないレベルの言語力があっても、質問に対して答えようとするなどの思考を特に必要とする場面では、聴覚障害児がすでに得ている個々の情報がバラバラになっていて、課題を適切に遂行することが難しい。

②頭の中にバラバラに存在している情報をつなぎ合わせるなど、情報処理の仕方そのものを指導しながら、言語指導や教科の指導を行う必要があることを示している。

(2) 他のケースも包括的に見て共通していること

共通点を端的に示しているのが、下の例(菊地、2003)である。

「行動例②K児: 5年生 木の幹を上から見たところを絵に



描く課題で、絵を描くことができず、側面から見た絵を描いた後に、その紙の下部分

を折って立てた。」
この例のよ

うに、児童は木の幹を描いた上図を見て、頭の中で木の幹を上から見るとしたらどのようなか想像するとき、木の幹の周囲の太さを測っているときには、木の幹が丸いことはイメージできていたと思われる。木の幹の太さを測るときの様子を動作でやってみて、と話したら、木の幹に腕を広げて回すような仕草をしていたからである。それなのに絵には描くことができないのは、図のように児童は自分の正面に見えている木の幹の像だけにとらわれていたためと考える。上から見た場合に視点を置き換えるとどうなるかを考えられず、苦肉の策として、平面に描いた幹の絵を、紙の下辺を折って立てたよう

だ。これは、上から見ると1枚の紙が立ててあるだけなので、児童に上から見せたが、おかしいと思うものの、どうしたらいいかわからない様子で首をかしげていた。

このときの指導としては、画用紙を丸めて筒状にしながら、「木の幹は丸いよね。だからこうやって丸めてみるよ。」と話し、筒状にした紙を児童の正面に立て、正面から見ると絵のようになり、上から見ると幹は丸いことも実際に確認できるようにした。その後、児童に木の切り株を見たことがあるか(イラストなども含め)を問うと、それは見ていて、切り株を見れば、木の幹が丸いことは知っていた。しかし、その情報がつながらないままであったのである。

次に、自分の正面に見えている像(情報)だけにとらわれてしまうことに着目したい。以下に別の例(菊地、2003)がある。

「行動例④B児: 4年生 3月3日のことが書かれたメモを見たのをきっかけに、3月2日に風邪で自分が嘔吐した体験を「きのう、ゲーしたんだよ。」という言い方をした。ところが、メモを見て話をした日は3月10日で、実際は8日前の出来事であるにもかかわらず、「きのう」と話していた。自分が話をしている日付を基準にするのではなく、目にしたメモに書かれた日付を基準にして話をしたものと思われる。」

ここでも、児童は、自分の目の前にある「3月3日」という日付の入ったメモに目が釘付けとなり、メモを見た日は3月10日なのに、その情報がどこかへ飛んでいる。自分が正面に見えたものを基準として、その前の日を「昨日」と言っている。正しくは、「(3月3日の)この前の日に・・・」などと言うべきだが、カレンダー上で今日が3月10日であることを知っていても、3月2日のことを昨日と言ってしまっている。

3. 考察

聴覚障害児の行動特性、学習のつまずきに対する指導として紹介してきた例(菊地、1999~2016)を包括的にとらえると、認知の特性として挙げられるのは、自分の正面に見えているものだけに着目し、視点を変えた見方をすることが難しいこと。他の情報とつながっていないとも言える。ある語を知っているかどうかを判別できないケースを最も典型的と考えると、視点を変えた見方をすることが難しいのは、極端な表現をすると聴覚障害児には正面に見える像がすべてであって、他の様々な視点からの情報を結び付けて全体像を構成するというプログラムに不具合があると考えられる。個々の情報がバラバラのままになっているのである。

聴覚障害児が友達とトラブルになったときに指導すると、相手の立場になって考えることや、周囲の友達が自分をどのように見ているのかを理解させるのがとても難しかったが、その理由もこれで説明できると考える。

文献

菊地和則(1999~2016)「聴覚障害児の学習場面における行動特性~(6)」及び「聴覚障害児の学習のつまずきに対する指導について(1)~(11)」(いずれも日本特殊教育学会大会発表論文集)

(KIKUCHI Kazunori)